

2021年度 (令和 3 年度) 学校評価自己評価表

加茂 中学校区 校番 45 福山市立 加茂小 学校

最終更新日 2022年(令和4年)2月28日

I 福山市

ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。

ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区	前年度学校関係者評価の主な内容 ・今後も加茂小学校・中学校へ行ってよかった・行かせてよかったという満足感を待たせる小中一貫した取組を行ってほしい。その取り組みを通して、学力と体力もアップしていただきたい。 ・加茂小学校・加茂中学校で働いてよかったという教職員のやりがいや充実感を持たせる学校の取り組みに期待する。先生方が一人で抱え込まないように、お互い相談しやすい雰囲気大切にしたい。	児童生徒の現状 ・1小1中⇒中1ギャップは少ない △友人との関わりや見方が固定化⇒互いの新たな可能性や成長に気づきにくい。 ・生活面⇒〇あいさつができる △基本的な生活・学習習慣、規範意識等に課題 ・学力面⇒△「基礎・基本」の定着・思考力等に課題 △家庭学習の習慣化 ・体力面⇒小〇改善傾向、中△県平均達成率23%	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	小 課題発見・解決力 創造力 社会性 中 考える・伝える・聴く力 見通す・振り返る力 社会性 豊かな心と、郷土加茂・福山への愛着・貢献心を持ち、自律的・協働的に、自らや社会の未来を切り拓いていく子ども ①豊かな心 ②必然性のある課題設定 ③見通す・振り返る
---------	--	---	---	---

III 自校	ミッション 〇豊かな学びのある学校 〇生き生きと活動している学校	学校教育目標 豊かな心を持ち、自ら学び、実践する子どもの育成	現 状 〈児童生徒〉 〇明るく、素直で、挨拶のできる児童生徒が多い。 △基本的な生活・学習習慣が身に付いていない児童もいる。 △学習面では、「基礎・基本」の定着や思考力・表現力が十分ではない。 △体力面では、俊敏性に課題がある。 〈授業〉 〇児童に『自己課題をもち、学びを楽しむ』力を育てるために、児童の学びを誘発する環境づくりを行った。 〇環境づくりのキーワードとして『遊びは学び 学びは遊び』を挙げ、遊びの要素を取り入れた環境づくりに取り組んだ。 〇カリキュラムの見直し、児童の興味関心に沿って他教科の学びをつないだカリキュラム構成を行った結果、活動のゴールに向けて児童自ら課題を設定することができた。また、遊びの要素から学びを楽しむこともできた。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 テーマ 内容等 めざす授業の姿	課題発見・解決力 好奇心をもって、やりたいことに取り組む。 身の回りの事象や体験から自力解決を設定し、自分や友だちが立てた見通しで取り組むことができる。 身の回りの事象や体験から自己課題を設定し、自ら見通しをもち、より妥当な方法で解決することができる。	創造力 提示された知識や技能を活用して学習を行うことができる。 各教科で獲得した知識や技能を他教科での学習と共通していることに気づくことができる。 各教科で獲得した知識や技能を他教科での学習に関連付けて活用しながら学習することができる。	社会性 友だちのよさを見つけることができる。 友だちの考えを受け入れ、協力して物事に取り組んでいる。 自他の考えを認め合い、友だちと協力して自分の考えを深めたり広めたりすることができる。	自らの課題を解決する楽しさを味わい、課題解決の力を他に汎用できる児童の育成 認知の仕組みから学習方法を見直し、児童が自ら多様な見通しをもてる授業づくりの工夫 見通す・振り返る ～？（なぜ・どうして）が、！（わかった・できた・なるほど）になる授業～
--------	--	-----------------------------------	---	---	---	---	--	--

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価							福山市立		加茂小		学校				
年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価（10月1日）				最終評価（2月末）				
							□指標に係る 取組状況	プロセス 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期（中期）経営 目標の達成状況	プロセス 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
1	自らの課題を解決する楽しさを味わい、課題解決の力を他に汎用できる児童の育成		継続	課題解決力（自らの課題をもち、解決の見通しをもって取り組む力）の育成	・「はじめの問い」「環境」「しかけ」にこだわった授業づくりを行う。 ・認知の仕組みから学習方法を見直し、個人の研究テーマに沿って授業改善を図る。	○「授業の中で考えたい、解決したい」と思った児童90%以上。 ○自己評価シートを作成し、肯定的評価90%以上。	○はじめの問い、環境、しかけにこだわった授業づくりを行った結果、「授業の中で考えたい、解決したい」と思った児童が84.6%であった。 ○個人の研究テーマに沿って授業改善を図り、自己評価シートで振り返った結果、肯定的評価が66.9%であった。	3	3	・児童の問いにこだわった授業改善を行う。 ・個人の研究テーマに基づいた授業を公開し、リフレクションを確実に行う。	□児童の問いにこだわった授業改善を行った。 ◎「授業の中で考えたい、解決したい」と思った児童が90.6%だった。 □個人の研究テーマに基づいた授業を公開し、リフレクションを行った。 ◎自己評価シートの肯定的評価が76.6%だった。	4	3	3	・教材理解を深め、質の高い児童の問いを生むための授業改善を行う。 ・個人の長所を生かした個人研究を推進する。
2	よりよい人間関係を築ける児童の育成		新規	友達のよさを見つけ、協力して取り組むことができる力の育成	・友達と協力できる場を学校生活の中に設定する。 ・自分や友達のよいところを見つけることのできる活動を設定する。	・友達と協力して活動できる児童80%以上 ・友達や自分の良さをを見つけることのできる児童80%	・学校行事で協力する場を設定したり、学習場面や生活場面で児童同士が交流する場を設定したり、各担任で取り組み内容を考え取り組んだ。「友達と協力して活動できた」児童は、92.6%であった。 ・様々な生活場面で「いいところを見つけ」を行った。また、いい所を伝える方法も付せんやICTを使うなど工夫して行った。「友達の良さを見つけた」児童は、87.3%。であった。 一方「自分の良いところを見つけた」児童は、74.3%と低かった。ここを重点にしていきたい。	3	3	・児童が自ら考え、友だちと協力できるような取組をすすめる。	□学習や活動を始める前に、どの場面で、どのような協力する場面が持てるかを子ども達と共に考えた。友だちと協力して活動できる児童は94.4%。友達と活動することが楽しいと感じた児童は96.7%であった。また、友達の良いところを見つけた児童は、91.1%であったが、自分の良いところを見つけることができる児童77.5%と低いままだった。引き続き取り組んでいく必要がある。	3	4	3	・来年度は、児童が自分のよさを認識し、実感できるような取組をすすめる。
2	主体的に運動遊びに取り組む力の向上		継続	・運動に親しみをもち、進んで体を動かそうとする力を身に付ける。	・授業、遊び会、学級レク等で様々な遊び方（運動材）を提示し、遊び方を工夫する素地をつくる。 ・多様な遊び場を活用し、運動に親しみをもたせる。	・「運動が楽しい」90%以上 ・「毎週2回以上運動をしている」90%以上	・委員会活動と連携し、子どもたちが安全に遊べる環境づくりを継続して行った。「運動をすることが楽しい」と答える児童の割合が93.5%と高い数値であった。今後、運動することによって抵抗感を感じる児童に対し、個々の実態に応じて取り組みを充実させたい。	3	3	・遊びにつながるような体育科の授業づくりを行う。	□冬季休業日中に学び研修を行い、「体づくり運動」の領域から、ＡＣＰの遊びを体育の授業に取り入れ、子ども達に様々な運動遊びを知ってもらった。大休憩でも遊びを活用する姿がみられた。 ◎「運動が楽しい」と答える児童の割合が96.3%と前回の数値よりも上回ることができた。	3	3	3	・子ども達の遊びの幅をより広げるためにも「体づくり運動」だけでなく、「ボール運動」や「器械運動」の領域からも、遊びを紹介していき、子ども達の運動に対する見方を広げるようにする。
2	小中連携を含む学校における組織マネジメントの向上		継続	・中学校区の課題に小中で連携し、取組むシステムをつくる。 ・校内の推進体制を整備（スクラップアンドビルド）し、PDCAサイクルに基づく業務改善の取り組みを全校で進める。	・小中の連携を密にし、課題を共有し、改善を図る。 ・学年会の時間と内容を主任主事が精選して設定し、学年主任が中心となり進める。	・中学校区推進協議会で課題に即した4部会を年4回以上行い、課題に対しての改善策を立て、実施する。 ・「仕事にやりがいを感じている教職員」95%以上	・学年会の内容を精選し、「週計画」等でも共有できなかった。部会の開催方法をもつて学年会を進めることができるようにした。「仕事にやりがいを感じている教職員」は、96.2%ではあったが、学年会の内容をより充実させていきたい。	3	3	・コロナ禍により、中学校区で4部会を実施することができなかった。部会の開催方法を工夫し、交流する。 ・学年の枠を越えて教材研究や児童の実態の交流を行う。	□冬季休業日中に、総合的な学習の時間の交流を行った。学年での3学期の授業づくりや、低・中・高学年に分かれて意見交流を行うことができた。その後は、コロナ禍のため、学年の枠を越えた交流の場を設定することはできなかったが、学年会の時間を設定し日々の授業等の交流を行った。 ◎「仕事にやりがいを感じている教職員」は、96.2%であった。	3	3	3	・総合的な学習の時間や行事、教科担任制などを通して、学級や学年の枠を超えたカリキュラムを構成する。そのために、学年の枠を超えて教材研究や児童の実態交流等を行う時間を定期的に設け、職員同士の交流の場を増やす。

[プロセス評価の評価基準]

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

[達成評価の評価基準]

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

[総合評価の評価基準]

評点	評価基準	
5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。